

## スクリブルから見た子どもの描画に関する一考察

奥 定 一 孝

(絵画研究室)

近年幼時の造形活動、とりわけ絵画表現に関する実証的な研究が盛んになってきている。幼児の絵画表現への関心は、現代の美術の動向にみられる原初的な場所への回帰の現象と歩を同じくするところがあり、一つにはこの場所からの発言を主張する手段として幼児絵画が登場し、その有り様が語られはじめたとみることができる。

個人的な表現の高みより、一般的、日常的な行為から、新しい方向性を求めようとする動きの中で、それを文化領域にもつ美術教育の実践の場においてもこの動きと歩調を共にして、幼児の絵画に多くの目が注がれはじめてきている。

しかし人間の無垢なる表現の世界である幼児絵画への関心の高まりは、美術すること自体から、そこに内在する教育的意味を求めようとする美術教育研究の必然的な道筋の上にこそあるのであって、幼児の絵画がその大きな手がかりにされはじめたと見るべきであろう。人間の描く行為の最も原初的な姿としてあるスクリブル (Scribble = なぐりがき) の段階にあっては、しかしながら、近年やっとイギリスのロード・ケログ女史によってその構造が明らかにされはじめたと言ってよく、教育現場における研究対象としては殆ど未開拓の状況にある。

一歳半途を過ぎる頃から、二歳、三歳、にかけて急速に変容していくスクリブルの状態は、恐らく生涯を通して最も起伏の激しいものであり、美術教育の意義や方向性を探る上で重要な手がかりとすることができよう。幼児絵画における図式の実態や、教育的成果に関する研究に比べて、スクリブルの調査研究の遅れは、研究対象とするにはあまりに衝動的で刹那的な世界であることに起因すると考えられるが、しかし理由の多くは、幼児の描画活動の結果である図式を、発達段階という共通の枠組みでとらえて、形式的な変遷やその意味を探究する研究が主流となるなかで、スクリブルは図式を形成するまでの予備的段階として過小評価されてきたことが上げられる。

子供の描画活動を、象徴的な型の獲得の過程として見ることは、子供の絵に独自の価値を見出すと同時に、その活動に大人がどう介入していけばよいかの具体的な方策を一つずつあらわにしていったという点で教育的には大きな成果があった。

しかしG・Hリュケが、子どもの描画発達を、“知的写実性”から“視覚的写実性”への移行、獲得過程でとらえて、そこに何らかの教育的配慮を求めてきたことに見られるように、本来その時々の子供のいきいきした感受力を問題にしていたものが、発達段階という形式的枠組みにあって感受力そのものを不活性にし、その形式的解釈が、それぞれの子供のもつ認識力、概念化等の能力を等閑視させてきたことはいなめない。

又このことによって、子供自身を、現在ある姿として認めることよりも、より新たなものを獲得し、高めることに教育的価値をおくことを、教育にたずさわる者自らが抵抗なく許してきたと言えよう。たとえ知的写実性から視覚的写実性へとスムーズに発展し得るように、教育的

配慮がなされたとして、それがどう教育的に価値づけられるかの問題は、依然として残されたままである。

一歳を過ぎる頃から歩行運動とともに始まるとされる線をしるす活動は、最初は全く衝動的な身体運動の軌跡に過ぎず、線自体はもとより、描かれる場所の予定もまったくないのである。

この衝動的な運動の痕跡から、描き出されてくる線自体を自ら確認し、意識的な活動として定着しはじめるのは予想以上に早い。ここにおいてはじめてスクリブルを表現活動とみなすことができるのであり、従ってスクリブルがはじまるのは普通一歳半ば過ぎころからであると考えられる。

幼時のスクリブルにみえる線については、先のR・ケログが、きわめて詳細な調査と分析を行っている。

女史は幼児期初期の多様な線が、20種の基本的な型に分類されるとして、それらが図形(diagram)の形成を通して複雑に結合され、図式の獲得へと向かう過程を実践に即して明らかにしている。言わば従来の情動的な線運動論、例えば点々から往復運動による弧状線へ、そして回転運動によるスムーズな円線へと移行するといった、一回的で平盤な解釈から出て、そこに内在する子どもの形に対する育成力を見出している点で、美術教育の面からも大きな意義をもつに至らしめたと言える。

しかし幼時のスクリブルにあらわれる複雑な線を、その結果としてのパターンでとらえて変質過程をみているため、かえって生み出される線そのものの生成のダイナミズムが希薄にされている。

スクリブルを、自己実現に向かう原初的な活動として、自己と対応しさまざまなイメージをつなぎとめる場所の創造活動と見なすなら、生み出される多様で不可思議な線を、いわばその場所形成という方向性をもった、より能動的な線として見る必要がある。

単なる身体運動的な痕跡が、次第に意識的になるにつれてスムーズになり、一定の場所を有したスクリブルを形造る。

線の動きそのものを意識しはじめることが、手の動きをゆっくりとスムーズにさせると言うてよく、場所の多くはゆるやかな曲線で不特定に幾重にも囲まれる。

この場所をより密なる対応の場に、より意識的に、よりインパクトの強い場に変容しようとする行為として初期のスクリブルを解釈することができる。

およそ三歳を境にしてこれらの線が大きな変容を見せはじめる。図式とよばれる子どもの象徴的表現形式の発生である。

子どもの図式表現は、見るものの再現か否かは別にしても、不明瞭な場所からより明瞭で意識的な場所に変質することであり、更により満足する型へと発展させられたものであると見ることができる。従って幼時の絵は、描き出すというより掘り起こしていくというべきで、その過程で図式を獲得していくと見るべきであろう。

子どもにとって満足のいく、具体的な形は、掘り起こされる場所とイメージとの競合の中から生み出されてくる。

## 集 中 線

初期のスクリブルに見られる変容は、先ずその場所に中心を作り出すことから始まる。線自体からみれば、漫然とした波状円線から、しだいに局所的に重複した円線となって描き込められたり、不確かなゆるやかな曲線の交錯する内部で、次第にやや激情的ともみえるジグザグ線となって一部分へ集中するなどといったものである。

瞬時に行われるこの一続きの予定のない線の束の中にも、自らとより密に対応し得る場所の形成に向かってある積極的な試みをよみとることができる。

その部分には、幾重にもつよく重ねられた、こだわりのある線がみられることや、集中する中心部にあらためて別の色の線で重ね描きしているものが数多く見受けられることは、スクリブルされる中で中心をもつべく集まる線〔集中線〕が、次第に必然的なものへと変質していることをうかがわせる。つまり、漫然と描き出される線そのものから、具体的なエリアを意識するものへの変質である。

さらに注目されることは、この時期、一定のまとまりのある場所を形成し、しかもその内部に中心をつくり出すこのような線とは異なり、場を浮遊する拡散的な線が同時に見受けられることである。

まとまった場所の形成に向かわないで、線自体が空間をよぎり、場を律していく。後に自動車の走りそのものに見立てられたり、怪獣の戦う激しい動きと同化させたりする、まさに線そのものに対応させて描き出されるスクリブルである。

ケログ女史のいう20種の基本形の中にも、迷走開線 (Roving open line)、迷走閉線 (Roving enclosing line)、として取り上げられているが、パターンとしてみる限りにおいて、この二つの基本形は、描かれた結果から識別すれば、同質のバリエーションとしか見えぬほど似通った線を形造っている。スクリブルにおける線の生成のダイナミズムは、これらの多様な基本形を、同質に、等価値に位置づける視点から解放して、本来の構成要素としてのより包括的な解釈を要求することになる。つまりスクリブルにあらわれる線は、一定の限られた領域を有するような内に向かう線と、まとまった場所を有しないで、常に空間を浮遊するような外に向かう線とに二分される。(図A-1～図A-4)したがってR・ケログのあげる基本形は、両者の生成過程における様相の一つに過ぎないのではないかとの解釈が成り立つ。

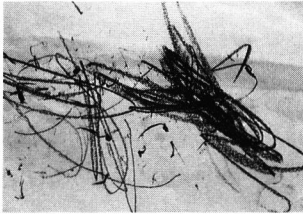
前者にあっては、幼時は引き出される線から次第に一定のまとまりを有する場所に目を注ぐようになり、インパクトの強い、自らとの対応において満足のいく程度にこの場所を形成し、線と同化する。また後者にあっては、線の動き、痕跡それ自体と同化し、線の力動の中で方向性を次第に感知する。

多くの実例から察して、初期のスクリブルにみられるこの二態の線は、不明瞭な中にも、ある程度の均衡をとりながら出現するが、幼児の多くは、その線を場所の生成へと向かわしめ、中心をもつスクリブルが次第に優位を占めるようになると推測される。

とにかく初期のスクリブルに、既に表現のための構築力、構成力の原初的な姿が現れ始めているわけで、場所との密なかかわりをもつほどに何らかのイメージが片言の言葉で付加されはじめてくる。

しかしこの場所が何に見立てられたかというより、見立ての行為を想起させる線との一体感がどう図られていったかが重要であり、幼児の場所の生成の姿を線そのものから汲みとること

で、今ある子どもとの直接的な共感の場を得ることができる。ここに教育することの一つの糸口が見いだされてくると思われる。



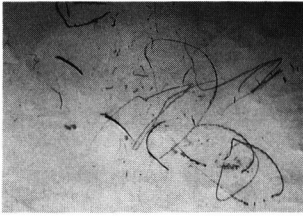
図A-1

A-1, A-2 (1才7ヶ月 女)

A-3, A-4 (1才9ヶ月 女)

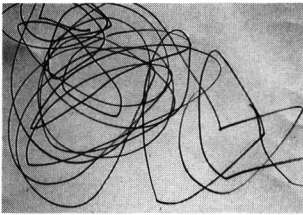
これらは同じ子が描いた絵である。

A-1及びA-2は同じ日に描いたものであるが、まだ線が安定しないまでも、前者では意識が紙面の局部へと集中し、後者では広がる様子が線から推察される。



図A-2

A-3, A-4はその約2ヶ月後に描いたものである。ここに異質な二態の線をはっきりみることができる。



図A-3



図A-4

## 囲 み 線

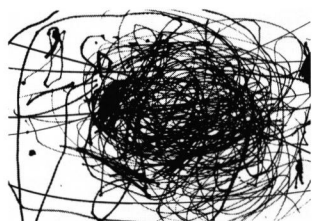
スクリブルに見られる場所の活性化、明確化、に向けてのもう一つの無垢な試みを、囲みの行為に見ることができる。

渦巻き線や、ジグザグ線など無目的な線から発したスクリブルがしだいに増幅されながら、やがてその回りに比較的慎重な長い線でぐるりと囲む線〔囲み線〕がほどこされる。その線はかなり明確に目にすることができ、大抵は先の中心をもつ線に比べて、一定の方向性と確信をもって描き出される。何度も重ね描いたり、かなり時間をかけて堪能できはじめたスクリブルに多く見受けられるものである。

無頓着で、利那的な線ではじめられたものも、やがて囲み線に至っては、確認されながらのゆっくりとした明快な線となり、時には中心線でみられたように、わざわざ別の色の線で描き出されるところから、この囲み線は特別な指向性を伴ったものとみることができる。(図B-1)

通常一定のスクリブルに対して一つの場所に決定ずけるべく全体が囲われることが多いが、二つ乃至三つの領域に分ける囲み線が描かれることもあり、また描き出される線の周辺近くを

幾度も回るような、ほとんどが囲み線のスクリブルもあり、実に多様であるが、どれもスクリブルの終わりの線で確信をもって決められているのが特徴である。(図B-2) 先の求心的でこだわりをもつ線に対して、この囲み線は、対応するエリアを決定づける、後の図の構成の底をなすものと解することができる。ここに至って安堵感、満足感を得る地盤が得られたかのごとく、初期のスクリブルの中でも囲み線のあるものが比較的多く、また長期にわたって描かれていて、多くの作例を見ることができる。子どもが自ら探り当てた実にたくましい線ということができる。

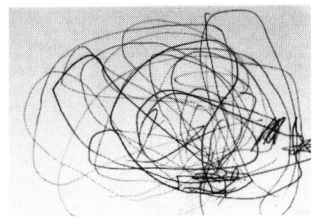


図B-1

B-1 (2才9ヶ月, 男)

スクリブル全体に囲み線のみられる例。

茶色の線で充分スクリブルを楽しんだ後、青色でゆっくりと全体が囲まれた。



図B-2

B-2 (3才2ヶ月 男)

スクリブルの上に複数の囲み線のみられる例。

3色のペンで描かれたスクリブルの上に5つのそれぞれ分けられた囲み線がみえる。

## 覆 い 線

対応する場所の明確化に向けての試みは、領域を見きわめるという比較的ゆるやかな形成に向かわせるが、スクリブルを秩序だった場所にするということに止まらず、ここにまた、場所の更なる鮮明化に向けて、幼児のもう一つの力強い働きかけを、この期のスクリブルに見ることができる。それは線に即してみれば、場所を切るというか変質させるというか、ゆるやかな円線の束によって浮かび出された場所の上から、まさに切るがごとく覆うように新たな反復する斜線や、曲線の束によって激しく描き起こすもので、先の二態のスクリブルなどに比べて極めてドラマティックなものである。(図C-1)

スクリブルされた線の上から、突如として異質な線によって、あたかも抹消するかのように描かれるため、この種のスクリブルは抹殺型とよばれて、成型に向かう他のスクリブルとは対称的に否定的な意味を付加されてきた。この時期にあつて、スクリブルを実際に消去するという行為はあり得ないのではないか。消去することはあらかじめ異なるスクリブルが予定されることを前提としており、幼児にとってそれが気持ちに沿わなければスクリブルの行為を中止するからである。

母体となるスクリブルは、ある程度明快に場所を占有するようなほぼ同心円の重複線が主体であり、そこに覆われる線は弧状の往復線が一般的で、時にはより強烈に二つの線の束で交叉される場合や、全面に比較的フラットに描き出されることもある。(図C-2)

その線は、母体のスクリブルの線に比べて通常激しく強く引き出されて、実に直截である。

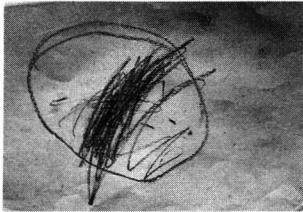
〔覆い線〕とも呼ぶことのできるこの線は、イメージを込める一定の場所をさらにインパクトの強い確かなものにしようとする子どもの自ずからなる試みのあらわれであり、ここに否定的な意味とは逆に、厚い心情の込められた構築力を見る思いがする。

覆い線が付加されるスクリブルは、円線を主体としたかなり明確な場所を形成するところから、通常幼児の造形活動における円獲得の時期として解釈されることが多い。

しかし例えば円のシューマに十字型の付加されたマンダラと、この激しい覆い線をもつスクリブルとを、パターンでみて同一視することは、そこに起こるべき共感の場を同質にし、本来幼児造形のもつ力動感をかえって希薄なものにしてしまうことになりはしないだろうか。さらに言えることは、これらの場所の変容をパターンを獲得し発展する過程として一様にとらえて、連続的に見ることはできない。それほど幼児のスクリブルは豊かで自在である。

幼児の愛くるしい線との戯れを、そのものとして、線自体の生成に目をやることは、子供自体との共感の場を得ることであり、従ってどのような型が獲得されたかというより、どのように場所が顕在化されているかが重要になってくる。それは子ども自体を今ある姿としてどう認め得るかの、言わば教育の方策と密接に関係してくるものと思われる。

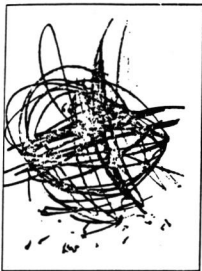
しかもこの後、長期にわたって徐々に形づくられる図式の時代、子どもの描画活動を最も特徴づけるこの図式なるものを、子どもの本来もつ構成力の面からどのようにとらえ、どう対処するかの教育の課題とも関係してくると思われる。



図C-1

C-1 (2才6ヶ月 女)

円の上から覆い線がほどこされているスクリブル。



図C-2

C-2 (2才4ヶ月 性別不明)

R・ケロックがマンダラとしてとりあげたスクリブルの一つ。  
交叉する強い覆い線がある。

## 含 み 線

円という場所の成立は、子どもの描画の発達段階の上からみるまでもなく、スクリブルの大きな変容であり、場所の顕在化に特別の意味をもたらすものである。

ここに至って、もはやスクリブルと呼ぶには不適切で、シューマ (Schema= 図式) と言うべきものに変質したとみることもできる。しかしシューマを言語的概念の図的表現と解すなら、一般に二歳中頃から三歳にかけて描きはじめられるこの円は、一定の概念の再現というより、概念化へ向けて一步踏み出した形式と見るべきで、従ってこれ以後のものを特別の意味をこめ

て図的スクリブルとよぶのがふさわしいように思われる。

単線で閉じられたこの円は、スクリブルの行為の中で突然出現することが多い。単独の場合もあるが、たいていはぱっと花開いたように同じ場所に多くの円が同時に描き出されるので、“まるまるがき”の名で愛称されている。(図D)

スクリブルする場所が幼児の逞しい構築力によってますます顕在化されるにつれて、イメージがもうこの場所ではささえきれなくなって、ぱっと飛び散ったような、誇張して言えば突如として夜空に浮かび開く花火の如くである。しかも円の一つ一つが個別的に意味づけられ、全体として統一された類で埋められる。スクリブルで起こされた場所が、円になることで、言語に優先された関係づけの行為がここにはじめて生じることになる。

子どもにとって円は、完結した動かしがたい場所の成立を意味するが、円という概念が獲得されたというのではなく、また一般には円の成立が直ちに、例えば顔というような一定の意味を伝える図式への道をたどるものでもない。円という場所が単に図式としてより、更に顕在なものとして、存在感の強いものとしてあるように、さまざまな試みがこの期のスクリブルにみられ、豊かな変容を遂げはじめるのである。ここにこそ円の成立の、ひいてはスクリブルすることの重要な意味があるように思われる。そしてこれらは、幼児のスクリブルの中で最も魅力的で不可思議な造形の世界を見せてくれるのである。(図E-1, E-2)

この円の顕在化への試みは、円の中にもう一つのしるし、又は形、を含める行為としてあらわれる。含める形は小さい点の集合であったり、押しつけられたような小さな線の束であったりもするが、多くは確かな、小さな幾つもの円状のもので、母体である円状の場所をこれらによって、いっそう有機的な場所に変容する。中に含めるというより、埋め込む、詰め込むというか、ここでも円状の中を新たな場所に掘りおこすといったほうが妥当であろう。円状の囲いの中の小さな形の線などは、実に慎重に確信的に引き出される。

中に詰め込まれるこの線を、先の囲み線や覆い線などに対して[含み線]と呼ぶことができる。含み線の母体ととなる円状線も、ここでは更にゆっくりと、線が気持ちで被せられるように引き出されて、長く引き伸ばされたり、部分的に円線が加筆されたり形状を次第にとりはじめる。

含み線が増幅されて、小さな含み線に混じって幾重にも往復線が被せられたり、母体の円の中が複雑に交錯する円線や波状線などでしばしば満たされる。この場合スクリブルの形状からは、先に上げた囲み線のあるスクリブルと、場合によればほとんど同様に見えるために、それと混同して扱われることが多い。スクリブルに見られるさまざまな形態は、発達段階で見ると、どれが先に現れてどれが後から形成されると言った一回的なものでなく、ほとんど同時期にしかも多様な現れ方をとるが、一人の子どもにあっては、囲み線のもつスクリブルと含み線のもつスクリブルとの間には、その現れ方にかなり明確な時間の開きがあるように思われる。

囲うことと、中に埋め込むこと、この単純とも見える描画活動の中に、その様態を知るうえでの重要な手がかりがあり、両者のスクリブルに見られる場所の顕在化の仕方を見きわめ、この間の推移をよみとることが今後の課題の一つと言えよう。

単なる形状からでなく、これらのスクリブルを見分けるには、そこにある線そのものが如何に引き出されているかを見すえなければならず、時にはルーペを使って線を拡大して見ることも必要である。線の引き出される速度はもとより、重なり程度、どの線が先に、どの線が後から引かれたかなどを見分ける、つまり形状を見ることと同時に、線を読み取ることを特に重

視しなければならない。

線の生成のダイナミズムと直接かかわることはスクリブルのみならず、今後の美術教育の実践の場を切り開くうえにも重要なことであろう。

円という場所の成立は、それがはっきりとした形態をもつことと同時に、場所が予定されてくことを意味する。従ってこれまでのスクリブルにみられた場所の明確化から一線を画して、形の顕在化に向けて一步をしるしたことにほかならない。

含み線をもつこのスクリブルは、ほとんど単一な形態をとらないで、複数で生み出されることが多い。しかも円内に小円形や点や線の束を含めるばかりでなく、円と円との間に直線状の形を挟んだり、含み線の母体が必ずしも円形状でなく、二本又は数本の曲線であったり、実に不可思議で複雑な様相を呈している。(図F)

言葉との関係づけに積極的であったこれまでのスクリブルの状態に比べて、この時期は、ただ黙々と描く子どもたちの姿が見られるようになり、線は、模索するように比較的ゆっくりと引き出される。「何を描いたの」と大人に聞かれた場合、たいていは子供の方が困り果てて、ちょっとした抵抗と照れ隠しを交えて「おぼけ」などと答えるのもこの時期である。

スクリブルが円という明快な形をとることが、必ずしも言葉との関係づけを密にすることにつながらない。返って非言語的なものへ対応の場が深められていくと解釈することができる。更に形の面から見れば、スクリブルすることが、一般に言われているような図式という形の概念形成に一方的に向かうものではなく、もっと内面的な場所形成への欲求があるのではなからうか。少なくともそう言った葛藤の中に身をゆだねていることを思わせるに十分である。

スクリブルの下に人間の形と見えるシェーマが既に描かれている例が、R・ケログの調査でも明らかにされている。

含み線のもつスクリブルの中にこのように図的表現と一体になっているものを数多く目することができる。このことは、含み線を通して子供はそこに具体的なイメージと結びつくシェーマを既によみ取っていることを示している。しかし含み線の中から子どもは直接的に図になる形を引き出すのではなく、子どもの多くは非具象的な形の中でイメージとの競合を図っていることに注目すべきであろう。その姿は、何を描くかの形式を求めるといふより、自己と同化するもの、子どもの側から見れば、自己の延長上にあるものへ向かって自らの場所を開拓しているとの解釈ができる。頭足人に代表されるように、幼児絵画における最初のシェーマの多くは人間や動物の形と関係づけられる。

人物表現とスクリブルとの関係については定説をみていないが、自己と共存し、まさに触れることのできるように場所を顕在化させることと密接に関連していることが推察される。含み線のもつスクリブルを始めて、早い子どもは数日間で人の顔のような図式的な形を描き始める。含み線のもつものは、スクリブル全体のわずかな期間であることからすれば、図式的表現の一部か、少なくとも図式の一形式と見ることができる。しかしこの含み線のもつスクリブルは、子どもによって現れ方は勿論、現れる期間、時間的長さもまちまちであり、一年近く持続する子供も多い。(図G-1～G-4)

円という場所の成立は、図式的表現形式の成立と密接な関連性をもっているが、含み線のもつスクリブルに見られるように、言語的概念の図的表現とは異なる表現の様相がある。言わばこの図的スクリブルは、子どもの描画活動の中でも図式的表現への過渡期ということにとどまらず、独特で重要な意味をもった表現形式の一時代として位置づけることができよう。



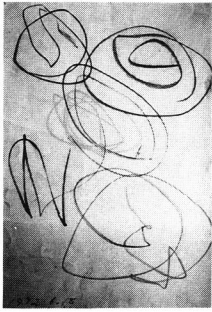
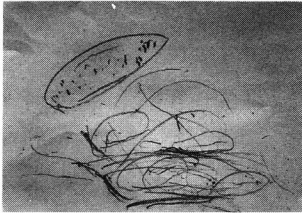


図 D

D (2才0ヶ月 男)

円がはじめて出現した時のスクリブルで、2才の誕生日に描かれたもの。

円が一つずつ色をかえて慎重に描き出された後、それぞれに「かめ」「ぞう」「らいおん」の名がつけられた。

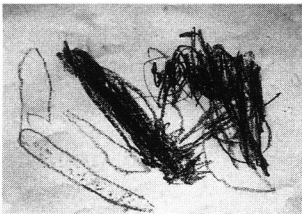


図E-1

E-1 (2才5ヶ月 男)

含み線のみえる2才児のスクリブル。

いろいろな囲み線による模索の後に、上方に明快な形で含み線のあるスクリブルが生み出された。



図E-2

E-2 (2才8ヶ月)

ぬりこめられた含み線。

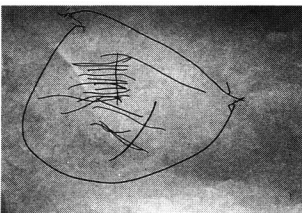


図 F

F (3才2ヶ月 男)

さまざまな含み線のみえるスクリブル。

含み線のもつ長円形の中に、更に直線状の含み線が加えられた後、上下に囲み線がほどこされた。



図G-1

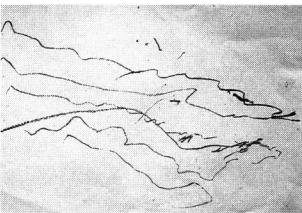
図G-1 図G-2 図G-3 図G-4

G-1, G-2, G-3, G-4

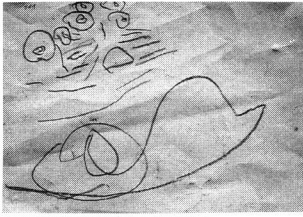
これらは同じ子どもの絵で、G-1は3才2ヶ月、G-2は3才5ヶ月、G-3は3才7ヶ月、G-4は3才8ヶ月の時に描いたものである。

G-1では配列線が含み線に用いられて、明確な形態をつくり出している。

G-4は「ねこ」と名づけられて、はじめにはっきりとした図式的表現がみられた絵である。その間にG-2, G-3のような不定形のもつスクリブルが多く描かれている。

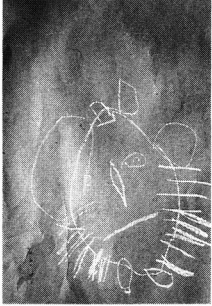


図G-2



図G-3

G-3では上下に2種類のスクリブルがみられる。円と直線の含み線のみえる上のスクリブルは「おぼけ」、下は「うさぎ」と名づけられた。主体は意識が込められた上のスクリブルで、下はその疲れのために気分転換をはかったものと思われる。



図G-4

## 配 列 線

このように円という場所が顕在化されることで、同時にさまざまな有機的な線が生み出されて、それらはスクリブルの中で単独な形態を一層明瞭にとり始める。その顕著なものとしてあげられるのが直線を主軸にしたスクリブルである。直線状のものが、縦または横に一定の間隔を置いて整然と並べられたり、十字形に交叉されたり、組み立てられて四辺形や網の目のように複雑な構造に発展する例も少なくない。従ってどの範囲をスクリブルと見るかの問題は残るが、スクリブルすることが、場所の顕在化に向けてどのように作用しているかを見る中で、線の生成を総合的にとらえることのほうが重要であろう。

R・ケログもこの幾何学的とも見える線に注目して、特に十字形に対して興味深い考察を行っている。女史は、子供の原初的な描画活動から生み出される図形 (diagram) を、矩形、卵円形、三角形、十字形、斜め十字形、不定形、の6種に分類し、それらが結合 (combine) 及び集合 (aggregate) されてさまざまなスクリブルの形態が生まれることを実証している。

しばしば子どもの絵にあらわれる直線状の配列を即物的な視点から、視覚的シンボル、特にマンダラ形成の過程とだきあわせてみているために、線が引き出される場所そのものの有り様が希薄にされている。

含み線のもつスクリブルに対して、直線上のものは整然と配列されるところから〔配列線〕と呼ぶことができる。

含み線のもつスクリブルが内面的なものへの様相を呈して、自己と共存し得るように有機的な形態をとるのに対して、この配列線は子どもの絵の中で、まさに線そのものとして存在するかのように、起伏の少ない線で明瞭に引き出される。線は比較的均一に力が込められ、間隔もバランスよく組み立てられて、線に気持ちをかぶせるというより、次々と並んでいく心地よさに魅せられて増幅されるといった感がつよい。(図H)

配列線は、単独でスクリブルを構成する場合もあるが、大抵は円のスクリブルがなされた後に、その上から明快に区切るように引かれることが多く、また含み線の一部のように、円形状

の中に埋め込まれる例も見られる。

配列線のもつスクリブルは、複合されたものであっても、線として、形として明瞭にされており、配列線をもつことによって、円という場所までも形が優先するよう、スクリブル全体が変質されると解釈することができる。

含み線のもつスクリブルが現れることと呼応して、この配列線が出現することから、両者に密接な関係があることが推察される。(図 I-1, I-2)

配列線は単独でスクリブルを構成する場合、線それ自体を配列することを、まさに楽しむように、一本又は数本単位で色分けされる例が多いことから、配列線自体、線遊びの性格を強くもっている。

このスクリブルはまた、はっきりと区別されているもの、リズムカルな美しさをもっているものにイメージが喚起されて、“おへや”“おはなばたけ”“おかざり”“ネックレス”といったものに意味づけされることが多い。つまり、含み線とは対称的に、配列線にはそれ自体整ったものという一つの形式を喚起させる何かがあり、またそういう自らの欲求が、配列線を生み出す契機となっている。子どものなかで線を並べるということは、場所を仕分けすることであり、含み線のもつスクリブルとは異なり、この配列線は形を気持ちよく明快なものにすると同時に、組み立てるといった構築的な方向に作用するのではないかと考えられる。

含み線のもつスクリブルを、よりインパクトの強い場所に掘り起こすように配列線が引き出され、配列線によって、含み線により確かな形式が与えられるように、含み線と配列線とは競合する関係にある。

R・ケロログもスクリブルの最も安定した形としてのマンダラに、円と十字形の結合を見てとっている。そしてマンダラから発して太陽型、人間型へと発展していく型の獲得の道程において、マンダラこそは後の具体的な形を表現する絵に至る肝心な部分を構成すると述べている。

スクリブルがしだいにマンダラから太陽型、人間型へと発達段階的な経路をたどることについては疑問を抱くところであり、配列線を十字形としてパターン化して見るところに、子どもが形を模索する姿としてスクリブルをとらえ切れないもどかしさがある。

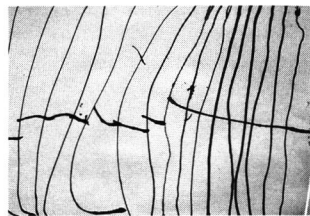


図 H

H (3才0ヶ月 女)

3色の線による配列線。

紙面の上下を目で図りながら、それぞれの色の線が構成よく並べられた後、黒の線でつなぎとめられた。

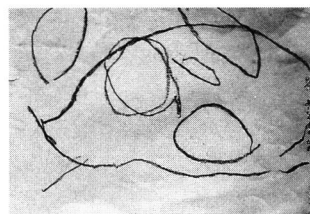


図 I-1

I-1, I-2 (3才4ヶ月 女)

同じ子どもによる、ほぼ同じ時期に描かれたスクリブル。

円の含み線からなる I-1 では自分の顔であることの説明がつけ加えられ、配列線による線あそびで生まれた I-2 では「お花ばたけ」と名づけられた。

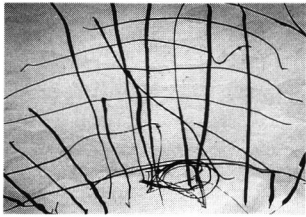


図 I - 2

## 表 出 線

太陽型は、配列線が円線と結合され、ときには含み線を伴って生成される場所としてみた場合、それが明確な円形を基盤にして成り立っているということが分かる。

円自体がより生々しい場所となるために、配列線が円の周辺から放射状に引き出されて、あたかも図式的に描かれた太陽の形のように変容させられる。

楽器のタンバリンに似た形態も、よくこの時期に描かれるが、線の生成の様相から、太陽型と同じような解釈ができよう。(図 J - 1, J - 2)

これらの線は配列線というより、強く指向性を伴う線として、〔表出線〕と呼ぶほうがふさわしい。表出線は配列線などと異なる点は、それが主に体性感覚としてのリズム感から引き出されることであり、配列線よりも早い線で、大小さまざまにリズムカルに並べられ、描き出されるのが特徴である。

表出線が生み出されるためには、並べられる基盤となり得る形、しかもリズムカルな線、形が十分のせられるような明確な形があることが前提とされる。

もっとも視覚的に明確な形は円であり、ほとんどの表出線は円を基盤として生み出される。ほとんどは同じ形がくりかえされるが、時には線や円、不定形と言ったものが入り交じって引き出される場合がある。

表出線は明確な円形を基盤とするところから、R・ケログが指摘するように、人間型のような図式的表現の移行期に現れると見ることができる。

円という場所の成立は、含み線と配列線という言葉ば情的なものとの知的なものとの競合によって図を際立たせるという重要な意味をもつものである。したがってそれは図式的表現形式の成立とも密接な関係をもっている。

子どもの絵は型の獲得過程として段階的発展形式の枠組みの中で検証されることが多いために、ややもすればスクリブルがシェーマよりも下位にあるものとみなされる。そして一般にはスクリブルから速やかに脱して、人間の形のような図式を獲得させることをよしとする風潮すら感じられる。

子どもの描画活動の結果を固定した型において見るのではなく、形や色そのものの生成の過程に目をやるのが、少なくとも描き出すこと自体に教育的価値をおく美術教育実践の場が切り開かれてくるものと思われる。

スクリブルすることが子どもの概念的思考の機能の獲得に、どういふ影響を及ぼすかについては今後に残された課題である。言語や身体活動などの面も含めた視点から、スクリブルすることの意味を求めることもまた重要であろう。

J-1, J-2 (3才4ヶ月 女)

同じ子どもによるいろいろな表出線がみられるスクリブル。

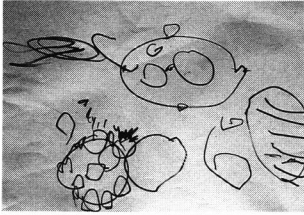


図 J-1

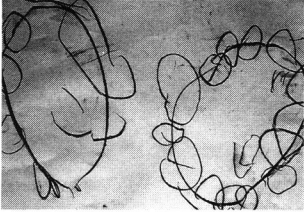


図 J-2

この論文は、伊予三島市内、西宇和郡内及び松山市内の保育園等で集められた600点近い幼児の絵の分析を中心にして、主にR・ケロググ女史の見解に対する批判の形式をとりながら拙論したものである。

集中線、囲み線、覆い線、含み線、配列線、表出線の名称は、いずれも線そのものに由来する適当な名称がなかったために、ここで仮に用いたものである。

子どもの絵の資料を提供して下さった各園の先生方、ご父兄の方々にこの紙面をかりてお礼申し上げます。

#### 参 考 文 献

- ローダ・ケロググ (深田尚彦訳) 「児童画の発達過程」黎明書房。
- G・Hリュケ (須賀哲夫訳) 「子どもの絵」金子書房。
- 鬼丸吉弘 「児童画のロゴスー身体性と視覚」勁草書房。
- H・リード 「植村・水沢共訳」 「芸術による教育」美術出版社。
- ローウェンフェルド 「勝見勝訳」 「子どもの絵」白揚社。
- ルドルフ・アルンハイム (関計夫訳) 「視覚的思考」美術出版社。
- R・ザイツ (木川・平山共訳) 「子どもを生かす美的教育」玉川大学出版部。
- 岡田 清 「幼児の絵と教育」創元社。他。